The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国の被災コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの有効性の違いに関する研究--都市コミュニティ、移行期コミュニティ、農村コミュニティの比較に着目して
Author(s)	王, 藝璇
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101619
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　王藝璇　）	
論文題名	中国の被災コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの有効性の違いに関する研究--都市コミュニティ、移行期コミュニティ、農村コミュニティの比較に着目して

論文内容の要旨

本研究は、都市化が進展する中国において、異なるタイプのコミュニティが取る災害対応について、それぞれに見られるソーシャル・キャピタルの有効性の違いを明らかにすることを目的とする。具体的には、2021年の“7.20”洪水災害後の中国河南省を事例として、質的手法と量的手法を組み合わせた混合研究法を用いて、災害直後と長期的な復興期において、都市コミュニティ、移行期コミュニティ、農村コミュニティという三種類のコミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの有効性の違いを分析する。さらに、長期的な目線から、中国の都市化プロセスにおけるコミュニティの災害対応のあり方について検討し、提言を行う。

第1章では、「中国の都市化と課題」、「中国の災害対応」及び「2021河南省洪水災害」に焦点を当てて論じながら、研究背景から浮かび上がる研究課題をまとめる。中国の急速な都市化がもたらす社会的・構造的な変化は、災害対応における各コミュニティの脆弱性やソーシャル・キャピタルの形態に影響を与えており、特に移行期コミュニティの災害対応力において課題が多い。異なる種類のコミュニティが持つ災害対応の特徴を分析し、実効性のある対策を研究する必要性が一段と高まっている。

第2章では、災害社会学、地域社会学の理論を踏まえて、本研究のキーコンセプトであるソーシャル・キャピタルとコミュニティに関する文献の整理・分析を行う。ソーシャル・キャピタルは、結束型、橋渡し型、リンク型という三つのタイプに分類され、それぞれがコミュニティの災害対応において異なる役割を果たすことが確認されている。また、既存の災害対応研究では、都市・農村コミュニティに関する知見が豊富であるが、移行期コミュニティのソーシャル・キャピタルについては未解明の部分が多い。このため、本研究は、移行期コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの有効性と災害対応力に焦点を当てる。以上より、以下の三つの研究設問を設ける。

(1) 時間の経過とともに、異なるタイプの被災コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの有効性はどのような違いがあるのか。(2) これらの違いはコミュニティ自体の特徴とどのように関連しているか。(3) ソーシャル・キャピタルの視点から、中国の異なるタイプのコミュニティの災害対応能力を高める方法は何であるか。

第3章では、本研究で用いた調査手法について述べる。本研究は量的調査と質的調査を組み合わせた混合研究法を採用している。量的調査では、河南省の三種類のコミュニティから合計1837件のアンケートを収集し、SPSSでデータ分析を行った。質的調査では、都市コミュニティA、移行期コミュニティBとC、農村コミュニティDの四つのコミュニティでインタビューや参与観察を実施し、ケーススタディを行った。

第4章では、量的調査の結果について詳細に分析する。ソーシャル・キャピタルの有効性を測定するツールを整理した後、鄭州市の中原区、二七区、金水区、新密市及び巩義市でアンケート調査を実施した。アンケートを収集した後、記述統計、分散分析（ANOVA）、ピアソンのカイ2乗検定などの統計的手法を用いてデータを分析した。

第5章から7章では、質的調査を通じて、ソーシャル・キャピタルの有効性とコミュニティの特性との間の関係を考察する。2021年から2023年にかけて、四つのコミュニティで複数回のフィールドワークを実施し、参与観察、半構造化インタビュー、フォーカスグループなどの手法を用いて調査を行った。

第8章では、これまでの調査結果を統合して、都市、移行期、農村コミュニティの災害対応におけるソーシャル・キャピタルの有効性について、時間経過という縦断的な視点、各コミュニティの違いという横断的な観点からの考察を行った。また、ソーシャル・キャピタルの視点から、高齢者女性、出稼ぎ労働者といった集団の災害対応における強みと脆弱性を検討した。最後に、コミュニティの災害対応能力を向上させる提案を行った。

終章では、研究設問への回答を通じて、研究の知見をまとめる。まず、ソーシャル・キャピタルの有効性について、都市コミュニティは農村コミュニティを上回り、移行期コミュニティが最も低いことが明らかになった。時間の経過による変化としては、農村コミュニティ以外では結束型ソーシャル・キャピタルが弱まり、都市コミュニティでは橋渡し型とリンク型が発展した。これらの違いは、コミュニティの管理体制や住民同士の関係性に関連している。都市コミュニティの住民は社交面で独立性と自己隔離の傾向を示している。移行期コミュニティの交流パタ

ーンは混乱しており、管理が不足している。農村では内部ネットワークが密接で、外部資源へのアクセスが難しい。また終章では、コミュニティの災害対応能力を向上させる提案も行う。最後に、本研究の限界と今後の課題について考察し、さらなる研究の方向性を提案する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（WANG YIXUAN（王藝璇））			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	大谷　順子
	副 査	教授	河森　正人
	副 査	准教授	宮本　匠

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国における都市化が進行する中で、異なるタイプのコミュニティが災害対応において示すソーシャル・キャピタル（SC）の有効性の違いを明らかにし、特に 2021 年の「7.20」洪水災害後の河南省を事例として分析を行ったものである。本研究は、地域社会学、災害社会学、人類学の視点を用いて、都市コミュニティ、移行期コミュニティ、農村コミュニティという三種類のコミュニティに焦点を当て、質的手法と量的手法を組み合わせた混合研究法を用いることで、災害対応における SC の役割とその変化を詳細に探求している。

都市、移行期、農村の３つのコミュニティの空間軸と、緊急と長期回復期の時間軸の２つ期で、３×２のそれぞれについて結束型、橋渡し型、リンク型という３つのSCから分析した大変意欲的な論文である。都市コミュニティでの先行研究があるところ、この研究では移行期コミュニティの現地調査と分析が極めて独創的である。

量的調査と質的調査のそれぞれで明らかにしているだけでなく、量的調査だけでは見えてこない現象を質的調査で浮き彫りに描いており、混合研究法により見せている研究方法も特筆すべきである。

各章の概要は以下の通りである。第１章から第３章では、中国の都市化と災害対応に関する背景を整理し、SC の３つの型で分類を軸に研究設問を設定している。第４章では、量的調査の結果を詳細に分析している。河南省内の都市、移行期、農村の各コミュニティで収集した 1837 件のアンケートデータを用い、統計的手法を用いて SC の有効性を測定した。第５章から第７章では、質的調査の結果を基に、SC の有効性とコミュニティ特性との関係を考察している。具体的には、都市コミュニティ A、移行期コミュニティ B と C、農村コミュニティ D を対象に、参与観察、半構造化インタビュー、フォーカスグループなどの手法を用いてフィールドワークを実施した。第８章と終章では、量的および質的調査結果を統合し、都市、移行期、農村コミュニティの災害対応力の違いを考察した。また、高齢者女性や出稼ぎ労働者といった脆弱な社会集団に焦点を当て、それぞれの強みと課題を明確化した上で、各コミュニティの災害対応能力を高めるための具体的な提案を提示している。さらに、本研究の限界として、調査対象地域の偏りやデータ収集における課題を挙げ、今後の研究方向として、より広範な地域調査や異なる社会集団への応用可能性を探るべきことを提案している。

本研究は、既存の都市・農村コミュニティ研究に加え、これまで十分に研究されていない移行期コミュニティにおける SC の役割に焦点を当てている。また、質的手法と量的手法を組み合わせることで、SC の３つ分類（結束型、橋渡し型、リンク型）が災害対応においてどのように機能するかを多面的に分析している。さらに、現地での長期フィールドワークに基づく実証的研究は、研究結果の地域性と実践性を強化している。特に、高齢者女性や出稼ぎ労働者といった災害に脆弱な集団への配慮を含む提案は、具体的かつ現実的であり、コミュニティのレジリエンス構築に資する内容となっている。また、学術的にも、都市化や災害対応における SC の理論的応用可能性を拡張するものである。

日本とは異なる歴史的社会体制や地理的条件などを持つ中国社会における事例を取り上げているものの、日本の各被災地の復興にも諸々の示唆を与えると、審査委員一同にとっても大変勉強になる大作である。

被災地というのみならず、長引くコロナ禍の中国当局の統制の下でのフィールドワークには諸々の困難があるなか、繰り返し現地入りを試み、量的及び質的調査を実施した意欲と行動力、研究プロジェクトの実施能力についても高く評価できる。

総じて、本論文は学術性と実用性を備えており、博士（人間科学）の学位授与に相応しい研究成果であると判断する。